



YES 通信



〒819-1116 糸島市前原中央2-2-22波多江ビル2F 電話 321-4119 2020年3月号

「フランクの大学がなくなりつつある」

昨年の末に「フランク大学は東京から消えつつある」という記事を読みました。私立大学の定員厳格化で私立大学がどんどん難化している状況に拍車がかかっていることを危惧していたのでとても印象に残っていたのです。その矢先、日本経済大学の方が塾にひょっこりお見えになったのです。

今まで大学の方がわざわざお見えになることはめったになかったのですが、ちょっとびっくりしました。しかし話を聞くと受験者がどんどん増えてきたとのことだったので、やはり首都圏だけではなく福岡でも同じような傾向が起きているのだと改めて感じました。

最初に紹介した記事には「××大学は今年から推薦の評定平均を引き上げた」とか「△△大学の指定校推薦でうちから対象者がいない」と入試広報に伝えたところ、逆に感謝された」等、大学受験の激戦化を示す話が飛び交っているを書いてみました。これは福岡でも同じで「今まで滑り止めとして受けていた大学がなくなった。女子はまだ女子大があるけど男子は本当に行く大学がない生徒が出てきている」との声を高校の先生から聞きます。

どうやら東京や首都圏だけではなく、フランク大学は消えかかっているのではないのでしょうか？
フランクという言葉を使うと何かレッテルを貼っ

ているように気が引けるのですが、用語として知っていただけだとわかりやすいと思い使わせていただいています。

フランク大学というキーワードが登場したのは2000年。大手予備校の河合塾が私立大学の難易ランク表に「フランク」を新設しましたことに始まります。河合塾の偏差値（入試難易度）は、合格者と不合格者の割合が50%ずつになる偏差値帯を算出して設定していました。ところがこの偏差値帯を算出できない（不合格者がどの偏差値帯にもゼロまたは少数）大学・学部が急増。そこで「フランク」を新設したのです。

その後「フランク」という言葉が独り歩きをして現在では「誰でも簡単に入学できてしまう大学」という意味だけでなく、「偏差値の低い大学」という意味でもネット上では使われるようになっていきます。このような格差が生まれた要因としては、少子化の影響と大学の増加、そして何よりも営利主義に走って定員以上に生徒を確保しようとするのが主な要因でした。

しかしそれが、大学の定員厳格化の影響で、ある意味適正な競争が行われることによって、下位校までもが難しくなってきたりしています。
7都府県の合計だと2010年に倍率2倍以下の

大学は133校。それが2019年には85校と大きく減少しています。このうち専門性の高い大学や単科大学を除くと、7都府県でわずか39校しかありません。

定員割れ状態も、前年度に定員割れ状態だった210校のうち、「前年は定員割れ、今年は定員充足」が67校、「定員割れだが区分は上昇」が58校。逆に「定員割れで区分が更に下降」は25校にとどまっています。今年はさらに減っているでしょう。

このように受験生にとっては昔なら西南大を目指していたような生徒が福大志望になり、福大志望の生徒が中村大になり中村志望の生徒が九産大になるというような玉突き現象が起きていて、とても厳しい環境になってきています。

今後は、大卒の資格は大学を選ばなければほぼ手に入れることが出来ていきましたが、それが困難な時代になってきているのです。貴重な国家予算を投じている訳ですから、受験生には酷かもしれませんがある意味正常な状態になってきています。



やる気相談室

授業料

私立高校の授業料実質無料化が4月より始まります。

コロナウィルスで学校の休校が続く中、福岡県の公立高校の入試が終了しました。幸いにして感染する生徒もおらず、一安心でした。あとは18日の結果発表が気になります。昨年に続き2年連続の全員合格になってくれることを祈っています。

今年の受験の傾向で一番驚いたのが、公立高校の受験を最後まで頑張った生徒がたったの半分しかいなかったことでした。私立大学の「入学定員管理の厳格化」により私立大学が難化したことにより付属の私立高校の人氣がでてきたことに関して、たびたびYES通信でも触れてきましたが、この4月より施行される「私立高校の授業料実質無料化」の影響も大きいのだと考えています。

下の図にも書いてあるように、今までは年収が270万円未満の場合は年間29.7万円、年収350万円未満の場合は年間23.7万円、年収590万円未満の場合は年間17.8万円、年収910万円未満の場合は年間11.8万円の支給を受けられていたのですが、それが今年の4月からは年収590万円未満の場合は年間39.6万円と実質授業料が無料になったのです。年収が590万円以上の場合、今までと同様ですが、年収が590万円未満のこの家庭にとってはかなりの朗報なのではないでしょうか？

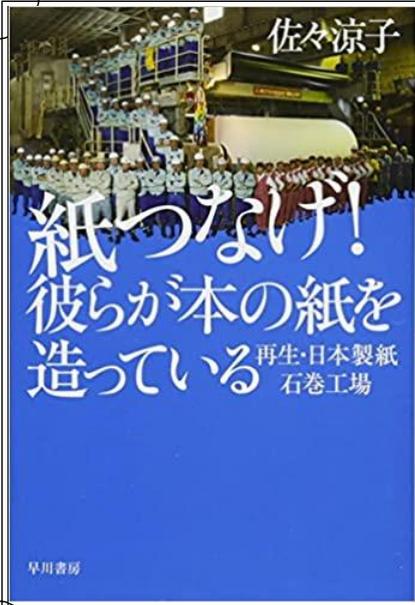
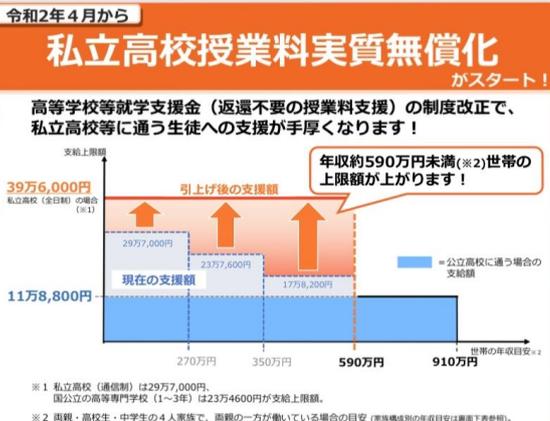
今迄は、私立が良いのはわかっているけど、授業料の負担が大きいことが最大のネックでした。年収が低いご家庭ほどその負担は大きく、「うちは公立しか通わせるのは無理です」という言葉を何度も聞いてきた私にとってはこの措置は非常にインパクトのある内容だと感じています。

今年、玄洋高校が1クラス(40名)減少したので倍率が間違いなく上がると思っ

ていたのですが蓋を開けてみると昨年以上に下がっていました。

この層は附属の高校に流れる層ではないので授業料実質無料化の影響を受けているものだと感じています。

この制度に関してはまだまだ始まったばかりで認知されていない部分もあると思いますので、今後はさらに私立に流れる可能性がありそうです。半数以上が受験しない公立受験がスタンダードになるのはちょっと寂しい気はしますが、子供たちの選択肢が増えるのは大歓迎です。



書籍紹介

紙つなげ

佐々涼子著

いわた書店という1万円選書で有名な書店はオーダーメイドで1万円分の本を選んでくれます。その書店お勧めの本です。危機管理の気持ちを維持継続し後世に残すためにも一役買ってくれる本です。この本に出てくる日本製紙石巻工場の皆さんの「我々が世の中を支えているのだ」というプライドと、これぞ日本人の鏡というような真摯な姿勢に感動しました。日本の出版業界を底辺で支えているという強い気持ちが奇跡を起こさせた物語でした。震災時の生々しい現場での話にドキドキしながら読みました。とても読みやすい本なのでお勧めです。私はこのストーリー以上に驚かされたことが2つありました。1つ目が紙をつくる工場の1つの製造ラインがなんとスカイツリー建設以上にお金がかかるということでした。当たり前ものを当たり前前に供給するために多額の資金が投入され、多くの人が関わっていることは、本当にありがたいことだと感じた次第です。2つ目は何気なく読んでいた本ですが、その紙質にも様々な拘りがあることを学び、最近では本を読む際の紙質が気になるようになりました。ジャンプ等の雑誌の紙はあえて厚く軽い紙にすることで安く存在感のある本になるのです。辞書の紙は極薄で強度が強いものです。まさに匠の世界なのです。